

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：32687

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770023

研究課題名(和文) 般若経の編纂過程に関する研究 『八千頌般若経』を中心に

研究課題名(英文) A Study on the compilation process of the Prajnaparamitasutras: mainly on Astasahasrikaprajnaparamita

研究代表者

庄司 史生 (SHOJI, Fumio)

立正大学・仏教学部・助教

研究者番号：00632613

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は般若経編纂過程の解明にある。より具体的には、現存する梵本『八千頌般若』の形成過程の解明を目的とする。従来の研究が、初期大乘仏教研究の文脈内で『八千頌』を扱う研究であったのに対し、本研究では初期から後期大乘仏教研究の文脈において『八千頌』を扱う。本研究の成果として、チベット語訳『八千頌般若』には3種のヴァージョンが現存していること、またそれらは同経典における段階的な改編の状況を示すものであることを指摘した。さらに、本研究期間において、般若経の形成過程を明らかにする上で重要となる、テンバンマ系のチベット語訳『八千頌般若』(ロンドン写本)のテキストデータを作成した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clear the compilation process of the Prajnaparamitasutras. This research work pointed out the Tibetan translation of the Astasahasrikaprajnaparamita has been transmitted in three different recensions. "A Study on the Tibetan Translation of the Astasahasrikaprajnaparamita in the London Manuscript Kanjur" was issued as an outcome of this research.

研究分野：インド哲学・仏教学

キーワード：大乘仏教 大乘経典 般若経 八千頌般若 経典形成史 経典翻訳史 チベット カンギョル

1. 研究開始当初の背景

(1) 大小種々のヴァージョンが現存する般若經の成立に関する研究は、1908年に渡邊海旭による「縮小説」(大→小)が出された後、1918年には椎尾弁匡が「拡大説」(小→大)を唱え、1910年代～1930年代にかけては、他の学者を巻き込んだ両説が混在していた。やがて1944年の梶芳光運の研究(梶芳[1944])により、再度「拡大説」が主張され、それが現在の定説となっている。ただし、今日的にみると、そこで用いられた文献資料には限界があり、その後新たに利用が可能となった文献を用いた研究が発表され、従来の研究に若干の修正が必要となっていることも事実である。般若經の編纂過程を解明するために、現在なされている課題、なすべき課題を示すと以下のとおりである。

(2) 《研究課題 A》般若經の原型に関する研究【現在他の研究者によってなされている課題】辛嶋静志による『道行般若經』研究が行われ(Karashima[2011])、また辛嶋静志とHarry Falkによる現存最古のガンダーラ語般若經写本の読解研究がなされた(Falk & Karashima[2012])。

(3) 《研究課題 B》旧『八千頌般若經』と新『八千頌般若經』との比較研究【本研究がなす課題】代表者がこれまで継続して行っている研究。チベット語訳『八千頌般若經』の比較研究。既に、『世尊母の傳承に隨順した解説(*Bhagavatyaṃnāyānusāriṇī-nāma-vyākhyāna)』(Jagaddalanivāsin 著、12世紀)が、新・旧二種の『八千頌般若經』の經文を引用し注釈を与えていること、そこで引用されている二種の『八千頌般若經』がチベット語訳として現存していることを、先行研究に基づいて指摘した(庄司[2009b])。そこでは二種のチベット語訳『八千頌般若經』の比較と、『世尊母の傳承に隨順した解説』の注釈に基づき、それら二種の原典自体の相違を指摘した。さらに、二種の訳語上の相違についても考察を行い、より古形が『翻譯名義大集』(Mahāvīyutpatti、9世紀)で規定された訳語と一致し、より新形はその規定とは一致しないことを指摘した(庄司史生[2010b])。

(4) 《研究課題 C》『四千頌般若經』と旧『八千頌般若經』との比較研究【本研究がなす課題】代表者によって漢文の目録とチベット文の目録を用いての研究が行われた(庄司史生[2009a])。また玄奘訳『大般若波羅蜜多經』第四会(旧『八千頌般若經』)と第五会(『四千頌般若經』)との比較研究がなされるべきである(庄司史生[2008])にてその方向付けを示した。

(5) 《研究課題 D》旧『二万五千頌般若經』と新『二万五千頌般若經』との比較研究【今後の課題】『二万五千頌般若經』とその注釈

書である『現觀莊嚴論』との影響関係を明らかにするために、今後なすべき課題である(その一部は、庄司史生[2010a]においてなされた)。

(6) 《研究課題 E》旧『八千頌般若經』から旧『二万五千頌般若經』への展開に関する研究【今後の課題】梶芳光運による全体的研究が既になされた(梶芳[1944])。今後は各個別資料の研究がなされるべきである(玄奘訳『大般若』第二会と第三会との比較研究、『一万八千頌般若經』と『二万五千頌般若經』との比較研究)。梵本『十万頌般若經』の校訂研究は、他の研究者によりなされている。

(7) 《研究課題 F》「藏梵仏典語彙集(仮)」の編纂【本研究がなす課題】既に二系統のチベット語訳の存在が指摘されている『解深密經』(加藤[2003])ほかや『法華經』(Karashima[2005~2008])等の研究成果と、代表者がこれまでに得た成果より着想を得たもので、『翻譯名義大集』収録以外の訳例を集成した「藏梵仏典語彙集(仮)」の編纂を行う。

以上の中、《研究課題 A》は既に他の研究者により着手されており、《研究課題 B~F》が今後なされるべきである。本研究では、《研究課題 B・C・F》をなすことを優先する。

2. 研究の目的

般若經の成立に関する研究は、既に他の研究者によってなされている状況である。本研究は、数ある般若經の中、現存『八千頌般若經』諸本の編纂過程を明らかにすることを目的とする。すなわち、同一の經典名を有しながらも変容していく仏教聖典を通時的にとらえ、編纂過程における改編の意図を明らかにすることにある。現存するネパール系梵文『八千頌般若經』が最も新しい形態を伝えていることは周知の如くである。本研究では、代表者が既に明らかにした、現存する二系統のチベット語訳『八千頌般若經』の梵藏対照テキストの作成と、注釈文献の確認することで、『八千頌般若經』の編纂過程を明らかにし、かつ結果として得られる二系統の訳例に基づき「藏梵仏典語彙集(仮)」を作成することで、他の研究への波及効果が期待されるものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究は「般若經の編纂過程に関する研究—『八千頌般若經』を中心に—」と題し、平成26年度から27年度までの2年間行う。この期間内に、前掲の取り組むべき課題のうち、《研究課題 B》と《研究課題 F》を以下の計画・方法により行う。実際の作業項目は以下の通り、三つのセクションに分けられる。

《研究課題 B-1》: 二種のチベット語訳と梵文の対照テキストの作成(三本対照テキス

ト)

《研究課題 B-2》: 注釈文献(『世尊母の伝承に随順した解説』)の読解。

《研究課題 F》: 「蔵梵仏典語彙集」の作成。研究計画と方法の詳細については後述する。なお、上記年度内に、以上三つの課題が終了した場合には《研究課題 C~E》に取り掛かる。これにより、より広く 般若経 の編纂過程が明らかになる。

(2) 研究計画遂行上の具体的な工夫として、既にインターネット上に公開されているテキストデータベース(GRETIL等)を活用し、各テキストを作成する。サンスクリット語テキストについては Digital Sanskrit Buddhist Canon (=DSBC)を、チベット語テキストについては、The Asian Classics Input Project (=ACIP)、Resources for Kanjur and Tanjur Studies (=rKTS)公開のテキストデータを使用する。また、漢訳テキストについては SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース、CBETA 中華電子佛典協会を使用する。

本研究において中心となる《研究課題 B》にて校合に使用する文献資料は、旧系統ではプダク写本(Fc本)、東洋文庫所蔵の河口慧海請来写本(K本)、ロンドン写本(L)、東京写本(T本)、新系統ではチヨネ版(C本)、デルゲ版(D本)、プダク写本(Fa, Fb本)、ナルタン版(N本)、北京版(P)、トクパレス写本(S本)である。以上の中、校合の際に優先されるべき文献資料は、下線を付したように「写本」資料である。チベット語訳『八千頌般若経』の系統研究については、代表者がこれまで取り組んできた課題である。テンパンマ系統のキャンギュルと蔵外写本中に旧系統が集中しているものの、テンパンマ系統でありながらも最も新しい内容を持つトクパレス写本の位置づけが、広くチベットにおける仏教経典の流布・伝播状況の解明を目指すキャンギュル研究において注目される点である。既に代表者によるチベット語訳『八千頌般若経』の研究においておおかたの系統は判明しており、本研究はその成果に従い、校合に使用する資料の優先順位を確定している。研究期間内に先述のすべての資料の校合が終了しない状況をも想定し、優先度の高い資料から着手する。

(3) 研究方法と手順: 本研究遂行のための作業項目(詳細)は、以下のとおりである。なお、《研究課題 B-1》と《研究課題 B-2》に関しては、対象となるチベット語訳『八千頌般若経』全 24 巻中、2 巻までの作業は終了している(平成 23 年度提出の学位論文『八千頌般若経の研究』にて作成済)。

《研究課題 B-1》: 二種のチベット語訳『八千頌般若経』対照テキストを作成する

1. チベット語仏典テキストデータベース ACIP で公開されているデータに基づき、原本データの情報を残しつつ、旧系統(T本)のテキストデータを作成する。簡易版の旧系統-新系統対照テキストが完成となる。

2. 以上で作成した《研究課題 B-1.1》の旧系統のデータに、同系統の他の写本(Fc, K, L本)を校合する。旧系統のテキストデータの完成。

3. 以上で作成した《研究課題 B-1.2》のデータの新しい新系統に、同系統の他の写本・版本(C, Fa, Fb, N, P, S)を校合する。旧系統-新系統対照テキストの完成。

4. 以上で作成した《研究課題 B-1.3》のデータに対応するサンスクリットテキストを張り付ける。『八千頌般若経』対照テキスト(梵・蔵 1・蔵 2)の完成。

5. 大谷大学所蔵能海寛請来写本、東京大学所蔵多田等観請来写本、花巻市博物館所蔵多田等観請来写本等の、蔵外写本の調査。蔵外写本の資料的価値とその伝播状況の解明。

《研究課題 B-2》: 注釈文献『世尊母の伝承に随順した解説』を読解する

1. 先の《研究課題 B-1》で作成した対照テキストにおいて、二種の系統間の本文に異同が確認された箇所について、『世尊母の伝承に随順した解説』(ここでは ACIP で公開しているデルゲ版データを使用)の注釈文を確認し和訳する。《研究課題 B-1》にて明らかになる二種のテキストに関する言及を確認し、裏付けをとる。

2. 以上で作成した《研究課題 B-2.1》の和訳箇所のテキストについて、北京版とデルゲ版を確認し、当該箇所の校訂テキストを作成する。《研究課題 B-2-1》校訂テキストの完成(当該箇所のみ)。

《研究課題 F》: 「蔵梵仏典語彙集(仮)」を作成する

1. 先行研究にて明らかとなっている二種のチベット語訳『法華経』Karashima [2005~2008]の異訳箇所から訳例を抜粋し、データとして整備しておく。

2. 先の《研究課題 B-1》で作成した対照テキストから、ひとつの梵文から二種の訳例が見られる箇所を抜き出し、『翻訳名義大集』と《研究課題 F-1.1》と照合する。

3. 《研究課題 F-1.1》と《研究課題 F-1.2》を基に、「蔵梵仏典語彙集(仮)」を作成する。

4. 研究成果

(1) 既に指摘した通り、チベット語訳『八千頌般若経』には、梵語原典を異にする旧・新二種のテキストが現存している。古系統と新系統との間にある差異の中、最も重要な点は、それが『現観莊嚴論』からの影響を受けたテキストであるか否かにある。古系統は影響を受ける以前のテキストである(庄司 [2009b] 他参照)。このことは、『現観莊嚴論』が本来

『二万五千頌般若』を「道 (mārga)」の立場から注釈したものといわれることから、同論からの影響を受けて改変された『八千頌般若』(系統 B)は、『二万五千頌般若』→『現観莊嚴論』よりも後にならなければ完成し得ないこととなる(庄司 [2015a] を参照)。既に指摘されている通り、『現観莊嚴論』には Vasubandhu (4~5 世紀頃)の『俱舎論』と同偈が見出される(谷口 [2002])。このことを考慮するならば、系統 B (=後期テキスト群)の『八千頌般若』は、『俱舎論』成立以後に形成されたものとも考えることも可能である。

(2) なお、より厳密には、上記の古系統四種の中でも系統が二つに分かれる。すなわち L (ロンドン写本)と T (東京写本)は古形を保つが、Fc (プダク写本)と K (河口将来単独写本)はより発展した形態である。部分的にはあるが、Fc と K はその読みが新系統の CDFaFbHNPSU = 梵文と一致する場合もある。諸本中における Fc と K の位置付けについては、次のチベットにおける三種の『八千頌般若』の伝承と関わる問題となる。

(3) 上記の梵語原典レベルでの二種の『八千頌般若』という系統分類(12世紀の Jagaddhalanivāsin による指摘に遡る)の他に、チベットでは訳語の相違という観点により、現存するチベット語訳『八千頌般若』を、(1) bzo sbyangs can、(2) sde can、(3) phreng ba can の三種に分類する伝承が存在していたことは先述の通りである(この分類は、経典内の梵語 śrenika を上記の(1)~(3)の三種に訳し分けていることに基づく)。詳細は拙稿に示した(庄司 [2015b/2016])。

(4) チベット語訳『八千頌般若』諸本において(1)~(3)の三種のヴァージョンは以上のように位置付けられ、それらの中で最古のものは(1) bzo sbyangs であり、最新のものは(3) phreng ba can (ネパール系梵本)といえる。そして、(2) sde can は両者の中間形態を示し、さらにこの(2) sde can は古系統の梵語原典に近似すると考えられる(2) sde can と、新系統の梵語原典に近似する(2) sde can とに大別することが可能である。

(5) カンギュルの系統とあわせて考えると、(1) bzo sbyangs は主としてテンパンマ系カンギュル、(3) phreng ba can は、ツェルパ系カンギュルの伝承と重なり、(2) sde can は紺紙金(銀)泥写本等、単独で流布している写本としてのみ現存していることになる。テンパンマ系、或いはツェルパ系カンギュルには(2) sde can は伝えられていないのである。また、これら(1)~(3)のうち、『翻訳名義大集』(Mahāvīyutpatti、9世紀)が規定する訳語と一致するのは、(1) bzo sbyangs である(庄司 [2010b/2014])。このことは、『翻訳名義大集』の規定と一致しない訳語が、必ずしもそれ以前のものであるとはいえないことを示唆するものといえる。なお、(1)と(2)の中間形態である Fc については、今後の検討が必要であ

る。

(6) このように、少なくとも三種のチベット語訳『八千頌般若』が現存している理由について、現状では明確な回答を持ち得ていない。しかしながら、前伝期における『八千頌般若』初訳の後、梵語のテキスト自体に改変が加えられ、やがて改変を受けた梵語原典がチベットにも伝わり、それに基づいて改訳がなされることにより、異なるヴァージョンのチベット語訳『八千頌般若』が並存することになったと推定することも可能であろう。

(7) 以上のように、『八千頌般若』は、梵語テキスト、チベット語訳テキスト、という二種の観点より系統を分類することが可能であることが明らかとなった。このことは、単に共時的にチベット語訳諸異本が現存するという事実のみを意味するにとどまるものではなく、それらが通時的に『八千頌般若』の発展段階を解明するための資料として極めて重要なものであることを示すものといえる。このことは、「初期大乘経典の研究」の枠組みではなく、「初期から後期に至る大乘仏教の研究」の枠組みにおいて、『八千頌般若』の研究がなされるべきであることを示すものといえる。後期インド仏教における『八千頌般若』の受容については、Gregory Schopen によってすでに指摘されている(小谷 [2000])。

(8) 少なくとも三種のチベット語訳『八千頌般若』が現存していることは、仏典のチベット語への翻訳過程を明らかにする上で、貴重な資料となりうるといえる。このように、経典形成史、経典翻訳史的研究という観点から、チベット語訳『八千頌般若』は、研究資料として活用されるべきであると考えられる。

(9) 本研究では、上記「3. 研究の方法」で提示した研究課題のうち、《B-1》の三本対照テキストの作成を行った。三本の中で最も重要となる古系統のチベット語テキストを、下記「5. 主な発表論文等」の〔図書〕庄司史生『ロンドン写本カンギュル所収チベット語訳『八千頌般若』の研究』(山喜房佛書林、2016年)として刊行した。同書では、紙幅の都合上、三本対照テキストの体裁をとることができず、古系統の伝承を伝えるロンドン写本カンギュル所収『八千頌般若』のテキストを、文節番号を付した上で提示し、新系統の伝承を伝えるデルゲ版と北京版、そして梵本についてはその所在を記した。本研究の研究期間内に終了しなかった研究課題は、今後の継続課題とする。

<引用文献>

- Falk, Harry & Karashima, Seishi [2012~2013] “A first-century Prajñāpāramitā manuscript from Gandhāra,” *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University*, vol.15~16
- Karashima, Seishi [2005~2008] “An Old

Tibetan Translation of the Lotus Sutra from Khotan (1)~(4), "Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University, vol.8~11. Karashima, Seishi [2011] A Critical edition of Lokakṣema's translation of the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā 道行般若經校注. BPPB, XII. Tokyo: IRIAB

小谷信千代 [2000] [訳] 『大乘仏教興起時代 インドの僧院生活』 春秋社

梶芳光運 [1944] 『大乘仏教の成立史的研究』 山喜房佛書林

加藤弘二郎 [2003] 「河口本『解深密経』チベット語訳テキストについて」 『印佛研』 51(2), pp. 891-889

庄司史生 [2008] 「小品系般若経内における『大般若波羅蜜多経』第四会と第五会の位置付け」 『仏教文化の諸相: 坂輪宣敬博士古稀記念論文集』 山喜房佛書林, pp.225-245

庄司史生 [2009a] 「四千頌般若経の行方」 『宗教研究』 359, pp.326-327

庄司史生 [2009b] 「チベット語訳『八千頌般若波羅蜜多』の系統分類とその基準」 『佛教史学研究』 52(1), pp.1-22

庄司史生 [2010a] 「『現観荘嚴論』注釈書に引用される『般若経』」 『日本西蔵学会々報』 56, pp.45-60

庄司史生 [2010b] 「チベット語訳『八千頌般若経』における訳語の特徴」 『印佛研』 58(2), pp.(107)-(110)

庄司史生 [2014] 「チベットに伝えられる三種の『八千頌般若』について」 『印佛研』 63(1), pp.(93)-(98)

庄司史生 [2015a] 「現存梵本『八千頌般若』はいかに形成されたか」 『中央学術研究所紀要』 44, pp.57-78

庄司史生 [2015b] 「プダク写本カンギュル所収『八千頌般若』の位置付け」 『印佛研』 64(1), pp.(44)-(49)

庄司史生 [2016] 「ロンドン写本カンギュル所収『八千頌般若』の位置付け」 『三友健容博士古稀記念論文集: 智慧のともしび』 山喜房佛書林, pp.(641)-(661)

谷口富士夫 [2002] 『現観体験の研究』 山喜房佛書林

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

庄司史生、近代日本に将来されたチベット語訳『八千頌般若』について、宗教研究、査読無、第 89 号別冊、2016、281-282

庄司史生、ロンドン写本カンギュル所収『八千頌般若』の位置付け、智慧のともしび: 三友健容博士古稀記念論文集、査読無、山喜房佛書林、2016、(641)-(661)

庄司史生、プダク写本カンギュル所収『八千頌般若』の位置付け、印度学仏教学研究、査読有、第 64 巻 1 号、2015、(44)-(49)

庄司史生、現存梵本『八千頌般若』はいかに形成されたか、中央学術研究所紀要、査読無、第 44 号、2015、57-78

庄司史生、チベットに伝えられる三種の『八千頌般若』について、印度学仏教学研究、査読有、第 63 巻 1 号、2014、(93)-(98)

[学会発表](計 6件)

庄司史生、チベット語訳『八千頌般若』ロンドン写本の特徴、第 68 回日蓮宗教学研究発表大会、2015 年 11 月 7 日、日蓮宗務院(東京都・大田区)

庄司史生、プダク写本カンギュル所収の『八千頌般若』について、日本印度学仏教学会第 66 回学術大会、2015 年 9 月 19 日、高野山大学(和歌山県・伊都郡)

庄司史生、近代日本に将来されたチベット語訳『八千頌般若』について、日本宗教学会第 74 回学術大会、2015 年 9 月 6 日、創価大学(東京都・八王子市)

庄司史生、般若経の編纂過程に関する研究、平成 27 年度法華経文化研究所第 1 回研究例会、2015 年 6 月 3 日、立正大学(東京都・品川区)

庄司史生、『一万八千頌般若』と『二万五千頌般若』について—般若経の編纂過程解明のための一つの視点として—、第 67 回日蓮宗教学研究発表大会、2014 年 11 月 8 日、身延山大学(山梨県・南巨摩郡)

庄司史生、チベットに伝えられる三種の『八千頌般若』とその現存状況、日本印度学仏教学会第 65 回学術大会、2014 年 8 月 30 日、武蔵野大学(東京都・江東区)

[図書](計 1件)

庄司史生、山喜房佛書林、ロンドン写本カンギュル所収チベット語訳『八千頌般若』の研究、2016 年、396

[その他]

ホームページ等

<https://rissho.academia.edu/FumioShoji>

6. 研究組織

(1)研究代表者

庄司 史生 (SHOJI, Fumio)
立正大学・仏教学部・助教
研究者番号：00632613